

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	大門 碧
論文題目	アフリカ現代都市のショー・パフォーマンスにおける若者たちの社会関係—出会いの場としてのウガンダ・カンパラの「カリオキ」—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、アフリカの現代都市において若者たちがいかなる社会関係を形成しているのかを明らかにするために、娯楽として公演されるショー・パフォーマンスをめぐって展開する諸関係に関する記述と分析をおこなったものである。アフリカの都市住民の社会関係に焦点をあてた文化人類学的な先行研究は、なんらかの共同体を同定してその構造や編成原理を明らかにするのではなく、むしろ、ひとつひとつの出会いにおける人びとの行動や集まりの様相に注目する視点を提案してきた。この視座はポピュラー・カルチャー研究にとっても有効である。すなわち、特定のポピュラー・カルチャーに専心する人びとはなんらかの共通するアイデンティティや価値観をもつと想定するのではなく、出会いの場において人びとの行為や集まりがダイナミックに変化する様相を研究対象とするのである。本研究は、こうした理論的見地に立脚して、ウガンダの首都カンパラにおいて公演されているショー・パフォーマンス「カリオキ」をめぐり人びとの社会関係の記述と分析を試みたものである。カリオキは音楽を多用するエンターテイメントであり、2000年前後にカンパラで創出された。現在は、若者が形成するグループによって夜間にレストランやバーで公演されており、大衆的な人気を博している。</p> <p>第1章では、先行研究をレビューして上記の理論的立場を明確にした。第2章では、カリオキの概要を記述した。また、カリオキに対する観客の評価にはポジティブ／ネガティブの両面があり、一般の人びとにとってはカリオキが両義的な存在であることを指摘した。</p> <p>第3章では、カリオキが勃興してきた社会的背景とその歴史的な過程を記述した。1990年代のウガンダにおける政治的・社会的な安定と電子メディアの発展が、カリオキを誕生させる条件をととのえたこと、また、カリオキを創出した若者たちは、最初は娯楽としてパフォーマンスをしていたが、やがてビジネスの世界へ参入してパフォーマンスの内容を多様化させ、多くの新しいグループを結成したり、ほかのエンターテイメントに参画していったことを明らかにした。</p> <p>第4章では、カリオキのパフォーマーたちを周囲の人びとがどのように表象しているのかを分析し、人びとはパフォーマーたちにネガティブな印象をもちながらも、排除するような態度はとらないことを示した。</p> <p>第5章では、カリオキのパフォーマーたちの出身民族や教育歴、カリオキをおこなう動機、そして受けとる報酬が多様であることを明らかにした。また、かれらが公演のために形成しているグループのメンバー構成は流動的であり、パフォーマーたちはそれを常態とみなしていることを示した。</p> <p>第6章と第7章では、カリオキをおこなうときに見られるパフォーマーたちの相互行為を記述・分析した。第6章では、公演のために毎回準備されるプログラムの作成と公</p>			

演の実施過程を分析し、パフォーマーたちが、ある程度の計画をたてて新規メンバーにパフォーマンスの機会を与えると同時に、即興性を高めて新規メンバーが主体的にショーに参加することをうながす技法を駆使していることを明らかにした。第7章では、ほかのパフォーマーの道具や「ストローク」、そして歌がひんばんに借用されていることを示し、かれらが互いに融通無碍なかかわりをもちながらパフォーマンスを組み立てていることを明らかにした。

結論では、本論文をまとめ、カリオキをめぐる人びとの社会関係に考察をくわえた。カリオキのパフォーマーたちは、全体として輪郭が明確な集団を形成しているのではなく、個々の公演グループもまた、メンバーが常に変動している。かれらの社会関係の特質は、その場で即興的に出会って別れていくことを常態とするところにある。20世紀終盤から現在にかけて、サブカルチャーにあらわれる社会関係が高い流動性や柔軟性を帯びるようになったことが指摘されているが、カリオキもまた、その特徴を有している。

(論文審査の結果の要旨)

アフリカの都市では、民族出自が多様で経済状態もさまざまな人びとが共存し、移動を繰り返している。従来の都市人類学的な研究では、都市民が出身村や帰属する民族、あるいは職業を基礎とした集団を形成しており、同時に、そうした集団の構成員は柔軟に変動していることが指摘されてきた。しかしながらこうした研究の多くは、民族出自や社会階層、学歴、職業などが類似している人びとを研究対象としており、多様な社会的背景をもつ人びとがどのような社会関係を築いているのかをミクロに記述・分析する研究は、あまりおこなわれてこなかった。

本論文は、東アフリカのウガンダ共和国の首都カンパラで公演されているショー・パフォーマンス「カリオキ」に関与する若者たちに焦点をあてて、かれらと一般の人びとの関係、かれらが形成するグループ同士の関係、そして、ショーを公演する場におけるかれら同士の関係という三つの関係を記述・分析することをとおして、若者たちの社会関係を詳細に解明した貴重な研究成果である。

本論文は、以下の三つの学術的な貢献によって高く評価することができる。

第一は、アフリカ都市人類学の分野における貢献であるが、本論文は、カルチュラル・スタディーズによるサブカルチャー研究の成果を援用しつつ、多様な人びとが移動と出会いを繰り返す場として大都市を位置づけ、そこにおける人びとの社会関係を解明している。カンパラでは近年、治安の安定や経済成長にともなって、コンピュータや携帯電話、CDといった電子技術やインターネットを主とする電子メディアが急速に発展した。本論文は、このような社会状況のもとで「カリオキ」がいかにか創造されたのかを明らかにしている。そして、「カリオキ」にたずさわる若者たちが、短期的で凝集性が低い柔軟な社会関係を形成している実態をあざやかに描きだした本論文の学問的な功績は大きい。

本論文の第二の貢献は、アフリカのポピュラー・カルチャー研究の分野から提出されてきた若者像を刷新したところにある。従来は、若者たちがなんらかのモノを使って新しい意味をつくりだし、それを共有することで集団的なアイデンティティを構築する姿を強調することが、ポピュラー・カルチャー研究の主流であった。これに対して本論文が、カリオキの公演グループの構成員の変化や、公演が実施される過程を詳細に記述・分析することをとおして、若者たちが異質な他者をそのまま受け入れ、それでもなお、他者とかかわっていこうとする共同性を創出していることを明らかにしたことは、非常に重要な貢献である。

本論文の第三の貢献は、定量的なデータを収集するとともに、申請者みずからがパフォーマーのひとりとして公演に参加するという手法を駆使して現場で生起している出来事を記録し、若者たちのショー・パフォーマンスへのとり組みかたを詳細に明らかにした点である。バック・ステージにおけるパフォーマーの実践やパフォーマンスが即興的に構築されていく過程を実証的に明らかにしたことは高い評価に値する。アフリカにか

ぎらず世界中で公演されている大衆芸能は、台本などの文書媒体をつかわずにその場における相互作用の積み重ねによって実施されているが、本論文は、人びとがショー・パフォーマンスを自在に生み出すプロセスを具体的に解明して、パフォーマンス研究にも大きく貢献した。

以上のように本論文は、アフリカ都市における若者たちの社会関係を、ショー・パフォーマンスの実施過程に着目しつつ、長期にわたる密度の高い参与観察をとおして解明した、非常に優れた業績である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 25 年 5 月 20 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。